
ビニール傘

あと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビニール傘

【コード】

N6711S

【作者名】

あると

【あらすじ】

雨が降ると、彼女は沈んだ顔になる。

雨が降ると、彼女は沈んだ顔になる。

道の真ん中で座り込んでしまうこともあった。

スカートが濡れてしまうよ、と声を掛けても、彼女は顔を上げない。そう言うときは、たいてい泣いていた。

少しすれば、私の心配をよそに、また歩き出す。

彼女はいつもビニール傘だ。

彼女の年頃なら、鮮やかな色のものや、花柄などが似合うはずなのに、透明の傘を手放さない。

どうして、と彼女の友達が聞いたことがある。

彼女は、周りがよく見えるから、と答えた。

私は胸を締め付けられた。

ビニール傘を好む本当の理由を知っていたからだ。

あの日、彼女はおろしたての傘を楽しそうに回していた。

夢中な彼女に、危ないよ、と言っても、大丈夫だよ、という返事しかなかった。

ずいぶんと、新しい傘を気に入ってくれたようだ。プレゼントした甲斐があった。

その直後のことだった。

雨でスリップしたトラックが私たちに突っ込んできた。

私は彼女を突き飛ばした。
若葉色の傘と、透明の傘が空を飛んだ。

彼女は青い顔で濡れていた。
大丈夫か、と声を掛けたが、彼女の目は雨よりも多くの涙を流していた。

それ以来、彼女は透明の傘を使い続けた。
彼女が言うように、周りがよく見えるからなのだろう。

でも、私のことは見えならしい。
しかたがないことだ。

雨が降ってきた。

一人でいる彼女のそばで、私は今日も見守る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6711s/>

ビニール傘

2011年10月8日01時55分発行